

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32658

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24880029

研究課題名(和文)近代化過程における非制度的金融組織の国際比較

研究課題名(英文)Comparative Study of ROSCAs in the Process of Modernization

研究代表者

小島 庸平(Kojima, Yohei)

東京農業大学・国際食料情報学部・助教

研究者番号：80635334

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代化の過程において制度的な金融機関にその機能が代替されると考えられてきた回転型貯蓄信用講(ROSCAs)の複線的な発展の方向性について、伝統的な無尽講から出発しながら日本の農村部を中心に根強く生き残った無尽会社と、インドネシアの農村部で現在活動を活発化させ、会社組織となるものも現れつつあるarisan motor(バイク講)とを比較しつつ検討する。本研究は、いまだ整備が不十分な低開発国における農村金融市場の内発的な発展に関する展望を、日本の歴史的経験を参照することによって切り開くことを目的としており、日本の無尽会社の経営史的分析和、インドネシアにおけるバイク講の現地調査を行った。

研究成果の概要(英文)：This project aims to conduct a comparative study between Japanese company ROSCA called Mujin-gaisya which is originated in traditional informal ROSCAs and Indonesian motor bike ROSCA called Arisan Motor which is now growing quickly and some of them are becoming company ROSCA. This study tries to reveal the process of the ROSCAs' historical change and prospect how can local financial market in developing countries achieve so-called endogenous development.

In Indonesia I conducted a field survey in Planggok and Somokaton hamlets which is located in central Java and collected data from all of the hamlets residents. And in Japan I collected historical materials about the company ROSCAs in the National Diet Library, some universities' library and Nagano prefecture. These materials are now under being analyzed and will be published in near future.

研究分野：農業経済学

科研費の分科・細目：農業経済学

キーワード：回転型貯蓄信用講 無尽会社 アリサン インドネシア 比較史

## 1. 研究開始当初の背景

一般に、近代化が開始される以前から、農村社会においては地縁・血縁などの社会的ネットワークに基づく金穀の貸借が盛んに行われており、特にインフォーマルな金融組織が経済発展の過程において重要な役割を果たすことが知られている。申請者は、すでに戦前期の日本農村部に存在した非制度的金融組織について一定の分析を行い、(1) 無尽講や匿名金融組合が、銀行制度からこぼれ落ちてしまう受信能力の低い小生産者をも包含しつつ、地域社会における自律的な資金循環を促していたこと、(2) とりわけ無尽講は、集落や行政村を超えた広範な地域から加入者を集め、困窮した人々に事実上の無担保・無利子金融を提供していたこと、(3) しかし、1929年に始まる世界恐慌の中でそれらの多くが破綻し、整理・解散に追い込まれたため、1930年代には郵便局や産業組合といった制度的金融機関に置き換えられていったこと、の3点を明らかにした。以上の日本の経験に関する研究の成果を踏まえ、日本の農村部における非制度的金融組織の企業化に関する分析のより一層の深化、アジア農村の近代化過程における非制度的金融組織の内発的な発展に関する国際比較の2点を目指している。

かつて日本にも数多く存在した無尽講は、国際的には回転型貯蓄信用講 (Rotating Savings and Credit Associations = ROSCAs) と呼ばれている。こうしたインフォーマルな金融組織は、近代的な金融市場が整備されていくに従い、制度的な金融機関によってその機能を代替され、役目を終えろと考えられてきた。たとえば、C.ギアツは、回転型貯蓄信用講を経済発展の中間段階に現れ、やがて消滅する”middle rung”と規定している。だが、このような単線的な見方は必ずしも正しいとは言えな

い。なぜなら、日本においては多くの小規模な無尽講が世界恐慌を契機に破綻・消滅した一方で、一部の無尽講が巨大化して営業無尽・無尽会社となり、さらに戦後には相互銀行となって地方金融市場において無視し得ない重要性を持ち続けたからである。C.ギアツの視点を継承して回転型貯蓄信用講を歴史段階的な所産として捉え、同時にその変容過程を複線的なものとして明らかにすることは、今なお制度的金融機関が農村部に十分には浸透していない低開発国における金融市場の内発的な発展を展望する上で、極めて示唆に富む作業であると考え

## 2. 研究の目的

本研究は、近代化の過程において銀行に代表される近代的な金融機関にその機能が代替されると考えられてきた回転型貯蓄信用講 (ROSCAs) の複線的な発展の方向性について、伝統的な無尽講から出発しながら日本の農村部で根強く生き残った無尽会社と、インドネシアの農村部で現在活動を活発化させ、会社組織となるものも現れつつある arisan motor (バイク講) とを比較しつつ検討する。本研究は、いまだ整備が不十分な低開発国における農村金融市場の内発的な発展に関する展望を、日本の歴史的経験を参照することによって切り開くことを最終的な目的とする。

### 2 - 1. 戦前期日本の営業無尽に関する研究

これまでの無尽講に関する実証分析は、澁谷隆一『庶民金融の展開と政策対応』に代表されるように、無尽講取締規則の強化といった制度史的側面が中心となってきた。そのため、個別無尽講史料に基づく研究や、会社組織化した無尽会社に関する経営史的分析は極めて不調であった。申請者はす

に個別無尽講史料を利用した研究を行っているため、ここでは大規模化し相互銀行の源流となった無尽会社について実証的な分析を行いたい。利用する史料は、雄松堂の営業報告書集成に収録された延べ 56 の無尽会社の営業報告書の分析を中心とし、研究者の受け入れ態勢が整っている長野県飯田市での調査によって地域特性を加味しつつ補強を加える。一般的な無尽講が世界恐慌の下で連鎖的に破綻していったのとは対照的に、なぜ同じ農村部に基礎を持つ無尽会社がこの時期にも存続することができたのか、その現実的な根拠を探ることが主たる課題である。

## 2 - 2 . インドネシアの“*arisan motor*”に関する研究

インドネシアには現在もお回転型貯蓄信用講の一つである“*arisan*”が数多く存在し、地縁的なつながりに基づく小口金融を活発に行っている。こうした *arisan* については近年研究が進んでおり、福井清一らは *arisan* が農村部における重要なセーフティネットの一つであることを明らかにし、申請者も村落の範囲との関連で予備的な考察を行っている（業績[4]）。また、2012年3月に申請者が試験的に聞き取りを行った3つの *arisan motor*（バイク購入を目的とする講）は、2000年代半ばに組織され、最大で総メンバー数 8,000 名を数え、メインのオフィスから 60km 以上離れた集落にまでサブグループを組織することもあり、極めて大規模かつ広範囲にわたって事業を展開していた。これらは農村の人々にとって馴染みやすい講 = *arisan* の方式に基づいてバイク購入のための融資を比較的低利で行っているため、現在順調に加入者数を増やしつつあり、会社形態をとるものさえ現れ始めている。こうした大規模な回転型貯蓄信用講の登場は、戦前期の日本における

無尽会社を想起させるものがあり、地方における自生的な金融機関の萌芽的形態として注目に値する。かかる *arisan motor* の経営の実態を把握することが、本研究の一つの課題である。

また、“*arisan motor*”を通じたバイクの普及は、農村に住む人々のモビリティを大幅に向上させ、農産物市場や労働市場へのアクセスを容易なものとする。したがって、非制度金融組織の発展によるバイクの普及を起動力として、農村の階層変動がさらに促進されるものと推測される。周知のように、インドネシアの農村経済研究では、C. ギアツのインボリューション論への批判として、階層分化の動きを検出することが一つの大きな課題であった。“*arisan motor*”の活動とそれを通じたバイクの普及が、今日のインドネシアの農村社会に生きる人々に与えるインパクトを、農民層分解の視点から実態調査に基づいて明らかにすることが、本研究のもう一つの課題である。

## 3 . 研究の方法

### 3 - 1 . 戦前期日本の営業無尽に関する研究

これまでの営業無尽に関する研究は、麻島昭一「相互銀行史の一考察 無尽会社時代を中心として」(『経営史学』第19巻第1号、1984年)や、Robert Dekle and Koichi Hamada(2000)“On the Development of Rotating Credit Associations in Japan” *Economic Development and Cultural Change*, Vol.49, No.1 などがあるものの、なお概説的な成果に止まっており、研究そのものが極めて少ない状況にある。本研究では、前述のように、雄松堂の営業報告書集成に収録された 56 の無尽会社の営業報告書を基礎史料として収集し、そこに収録された貸借対照表や損益計算書などから、無尽会社

の経営指標に関するデータベースを構築する。また、1928年から1934年の世界恐慌期に出版された全国無尽集会所『全国無尽会社要覧』や、中川静人『全国無尽会社業績大鑑』（1935年）は、営業報告書集成には収録されていない無尽会社の情報についても掲載しているため、これを利用してデータベースの補強を図る。また、各社の営業報告書や『全国無尽会社要覧』には、無尽会社の経営環境に関する報告も記載されているため、数字上の動きを説明するための様々な記述情報を引き出すこともできる。もちろん、同時代の概説書や、戦後に出版された相互銀行の社史類も有益な情報源として期待できよう。営業報告書に基づくデータベースの構築と文献収集を通じて、当該期の日本農村部を中心に広汎に存在した無尽会社を俯瞰することのできる体制を整え、これを基礎として無尽会社の歴史的実態を明らかにしたい。

以上のように全国的な無尽会社の概要を把握した上で、農家負債に占める無尽講の割合が極めて高かった長野県下伊那郡をフィールドとして、無尽会社に関する史料の収集を行う。予備的な調査によれば、飯田市歴史研究所には南信無尽会社（営業報告書集成には未収録）の営業報告書が収蔵されており、地域社会の動向を踏まえた詳細な分析が可能である。また、長野県では県外からも加入者を集めていた善光寺無尽の破綻が農村負債の社会問題化の契機となったように、極めて大規模な無尽が存在したことが知られている。長野県立歴史館や飯田市歴史研究所では、こうした無尽講に関する行政史料や、当時の地元新聞を豊富に収蔵しているため、これらを利用して地域における具体的な無尽会社の活動と、その農村社会への影響を明らかにする。

### 3 - 2 . インドネシアの“ arisan motor ”

に関する研究

申請者が2012年3月に予備的なインタビューを行った arisan motor は、ジャワ島中部に位置するジョグジャカルタ特別区の Arisan Motor Astora、Perkumpulan Arisan Sepeda Motor “CV.Sehati”、および東ジャワ州ソロ市に本社を置く Arisan Motor Honda Spacy の3つである。そこではメンバーの居住地、落札時期、バイク購入金額、バイク車種などの一覧表のコピーを入手し、現在そのデータを集計中である。また、このうち2011年12月に組織された Arisan Motor Honda Spacy のサブグループにはすでに申請者も加入しており、参与型観察を行うことが可能である。本研究では、これらの arisan motor に対して継続的に調査を行い、近代的な普通銀行やイスラム銀行、協同組合などといった競合する金融機関との競争関係も視野に入れながら、 arisan motor の経営分析を行う。インドネシアの arisan motor は、日本の無尽会社とは異なり、なお会社形態をとっていないものも少なくない。そこで、経営者へのインタビューと、中部ジャワで入手した記録簿を集計したデータを突き合わせることで、その財務状況等を明らかにする。

また、 arisan motor の加入者となる農村住民に対しては、(1)世帯属性(所有/経営耕地面積、農業/農外所得、家族員数等、担保となる資産の有無)、(2)金融機関の利用情報(普通銀行、イスラム銀行、協同組合、 arisan、親戚・知人)、(3)バイクの有無と入手方法(現金か掛買いか arisan motor を利用したのか、掛買い・ arisan motor の場合は利率はどの程度か)の3点に関して、一集落(dusun) 悉皆調査をジョグジャカルタ特別区の4集落で行う。これらの4集落は、ジョグジャカルタ中心部から10km程度と比較的近いスレイマン県から2集落、30km以上離れたグヌンキド

ウル県から 2 集落を選定する。申請者は、ガジャマダ大学の協力の下、すでにグヌンキドゥル県の 1 集落について調査を行っており、そこでは英語で意思疎通の可能な学生 10 名をインタビュアーとして雇用し、さらに共同研究者として同大の若手講師である Subejo 氏、Uuntari 氏、Raya 氏に同行をお願いした。本研究においても、これとほぼ同様の編成で調査を行う予定である。こうした集落全戸悉皆調査を通じて、農村における金融機関利用状況の現状を明らかにし、*arisan motor* が農村の中で有する機能とその意義・限界を検討する。

#### 4 . 研究成果

日本の無尽会社に関する実証分析からは、( 1 ) 恐慌下にあっても無尽会社は順調に加入者を伸ばしており、その背景には金融恐慌による一般銀行における預金への不安があったこと、( 2 ) 無尽会社は掛金の徴収や新規加入者の募集などを外交員の積極的な戸別訪問によって行っており、同時に地縁的な共同性をも利用していたこと、( 3 ) そうした地縁的な共同性が、必ずしも常に担保を取るとは限らない無尽会社のにあつてはデフォルトのリスクを低減させていたこと、の 3 点があきらかとなった。

また、インドネシアのバイク講義については、バイク講の組織にあたっているのは公務員や教師、政治家などといった知的水準の高い職業についているものや、ある種の宗教家のような特別の信望あるものが多く、バイク講の加入者を募るに当たっては、組織社の職業的威信や社会的信用が重要であること、バイク講の参加者の社会階層は中間層が多く、またすでにバイクを購入した者が 2 台目の購入のために利用するが多いこと、バイク講の利用度は特に 2000 年代後半から高まりつつ有り、2010 年度から 12 年度にかけては新規

購入バイク台数の約 4 分の 1 を占めるようになっており、今後も自動車やノート型パソコンなどに対象を拡大させつつ、さらなる成長が見込まれること、の 3 点を明らかにした。

#### 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

#### 6 . 研究組織

##### (1) 研究代表者

小島 庸平

東京農業大学・国際食料情報学部・助教  
研究者番号：80635334

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者